

但馬地域に発生したピーマン炭疽病

近年、但馬地域のピーマンほ場で果実表面が直径5～30^ミの円～楕円形に陥没し、灰褐色、後に同心円状の菌そうに覆われ、オレンジ色の分生子塊が形成される症状が発生した。また、果梗が褐変し、葉に斑点病に似た症状も発生した。原因を究明した結果、新たに糸状菌(カビ)の仲間が確認された。

内 容

1 発病および被害の様子

果実表面が直径5～30^ミの円～楕円形に陥没し、灰褐色化し、後に同心円状の菌そうに覆われ、オレンジ色の分生子塊が形成される(写真1)。

また、果梗が褐変し、葉に斑点病に似た症状も発生することがある。

斑点病と異なり、あまり落葉しないため、遠目には青々として見えるが、ほ場内に入ると全果実が罹病しており、収穫皆無となる場合もある(写真2：全果罹病し、農家が収穫をあきらめたほ場)。主な発生時期は秋雨期の9～10月であるが、梅雨期に発生することもある。

2 病原体

コレトトリカム シモンディシイ (*Colletotrichum simmondsii*) またはコレトトリカム グロエオスポリオイデス (*Colletotrichum gloeosporioides*) という糸状菌(カビ)である。植物体上または土壤中で生息する。菌の生育温度は、前者は10～30℃、最適温度は25～27.5℃であり、後者は10～35℃、最適温度は27.5～30℃と比較的高温性の菌である。

3 伝搬様式

ピーマン上に生息している、あるいは罹病果実の

残さなどを含んだ土壌中の菌が雨滴とともに飛散し、菌の分生子(胞子)が発芽、付着器を形成して侵入・感染する。

4 寄主範囲

ピーマン・トウガラシだけでなく、トマトにも病原性がある。その他、イチゴ・マメ科作物(インゲンなど)にも病原性がある。

5 防除対策

早期発見・早期防除に努め、罹病果実を見つけたら、ほ場外に持ち出し、確実に処分する。また、果実が傷つくと感染しやすいので、適正なせん定、枝吊りを行う。可能であれば、防風ネットなど防風対策を行う。防除薬剤としてはピーマン炭疽病に対し、TPN水和剤(商品名：ダコニール1000)、TPN・アゾキシストロビン水和剤(商品名：アミスターオブティ)が登録されている。特に、前年に本病が発生した地域では梅雨時期から予防的に散布を行う。

今後の方針

病原菌の宿主範囲調査とピーマン炭疽病に対する新規薬剤の薬効試験を行い、輪作可能な作物や防除効果の高い殺菌剤の選定を行う。

神頭 武嗣(環境・病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2416)



写真1 ピーマン炭疽病罹病果実



写真2 ピーマン炭疽病甚病発生ほ場